

名古屋市

つついちょうてんのうさい

筒井町天王祭



歴史

祭礼がいつ始まったかは不明ですが、「尾張年中行事絵抄」には建中寺前の天王祭で派手な造り物を製作し話題となっていたことが取り上げられています。情妙寺前町では独自の天王祭を行っており、天保3年（1832）に湯取車を購入し、山車を曳行するようになりましたが、建中寺前町には山車所有の許可が下りませんでした。神皇車は明治20年（1887）に広井町新屋敷（現在の中村区）から譲り受けた山車です。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

6月第1土曜日・日曜日

祭礼場所

筒井天王社・湯取車天王社・物部神社

内容・見どころ

筒井町天王祭は6月第1金曜日の宵祭から始まり、土曜日・日曜日の2日間にわたって開催されます。日曜日午前中には出来町天王祭の3輦の山車とともに徳川園の山車揃えに参加します。神皇車のからくりは、神功皇后に由来するからくり演技で、巫女が白煙とともに赤い顔の竜神となります。湯取車のからくりは神子による湯立神事であり、舞い上がる紙吹雪が見どころとなっています。



名古屋市

できまちてんのうさい

出来町天王祭



歴史

出来町の天王社の祭礼が山車まつりに発展した時期は定かではありません。伊勢門水の「名古屋祭」には、江戸時代中期の宝暦年間頃に出来町では山車所有の許可が下りなかったため、提灯台として地中に山車の車輪を埋め、検分後に曳き出したと伝えられているという記述があります。記録上、出来町の天王祭に新出来町2輦、古出来町1輦の山車が現れるのは文政7年（1824）のことです。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

6月第1土曜日・日曜日

祭礼場所

各町須佐之男神社・赤塚神明社

内容・見どころ

土曜日・前日は天王社での神事を行い、町内を曳行します。午後には3輦の山車の出会いがあり、中之切と東之切の天王社に参拝し、東之切で提灯に点灯して帰路に就きます。日曜日・後日も町内を曳行し、午前中に筒井町の2輦の山車とともに徳川園山車揃えに参加します。その後、出来町の3輦は明倫公園付近で出会いを行い、西之切の天王社に参拝後、提灯に点灯し、千秋楽の挨拶を交わして帰路に就きます。



比良祭り



祭が行われる六所神社は北比良と南比良の境に位置します。祭の開始時期は定かではありませんが、天王社の勧請が明暦年間であることからそれ以降のことと言えます。太平洋戦争後は、一時祭の中断があったものの、地域の熱意で昭和40年（1965）に山車の曳行が再開され、不定期ながら祭が行われました。その後祭礼日を休日に変更し、隔年で山車を曳くようになっていました。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

10月第2日曜日（山車曳行は隔年）

祭礼場所

六所神社

内容・見どころ

祭の当日は2輦の山車（二福神車・湯取神子車）がそろそろ山車揃えが行われます。山車揃えは昼に1回、夜の山車が帰路に就く前に1回、いずれも六所神社前で行われます。山車揃えは、まずその年の祭の当番の山車の綱割り大將が楯きりを団扇で扇動し、相手側の山車に向けて前進します。すると相手側の綱割り大將は大団扇でそれを追い払い、最初の山車は交代します。それを3回繰り返してから交代します。山車揃えは祭の一番の見せ場です。



花車神明社祭



江戸時代、三之丸天王社（現在的那古野神社）の祭礼では2輦の車楽にあわせて、名古屋村や広井村ほか氏子町内からは車楽に献灯する目的で、見舞車という小型の車が出されるようになりました。また、広井村内の各地区でもそれぞれ天王祭が行われており、文政元年（1818）以前には既に車が出ていました。明治時代以降、三之丸天王社と関係が薄くなった後も、地元の天王祭として受け継がれています。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

10月第2土曜日・日曜日

祭礼場所

神明社

内容・見どころ

近年は二福神車が祭礼前日の金曜日に、宵曳きを行い、名古屋駅周辺まで山車を曳き出します。祭礼初日の午前中は、それぞれの町内を巡り門付けなどを行います。午後には白龍神社で3輦がそろい、からくりを奉納後各町内に戻り、提灯を掛けます。夜にかけて神明社に集合しからくりを奉納します。日曜日午前中は各山車、それぞれで所縁の町をまわります。午後は柳里神社で3輦がそろいます。



若宮祭り



祭礼日 5月15日・16日

祭礼場所 若宮八幡社

歴史

元々現在の名古屋城内に鎮座していた若宮八幡宮を、名古屋城築城の際、現在地に遷座することになったと言われています。祭は当初氏子町が笠鉾を出すなどしていましたが、延宝2年（1674）には初めて山車が奉納され、安永元年（1772）には7輛の山車がそろいました。昭和20年（1945）、戦災により河水準と福祿寿車以外は焼失し、その2輛も出来町に売却されますが、その後、福祿寿車は返車され祭も復活しました。市の無形民俗文化財に指定されています。

内容・見どころ

15日の試楽祭では、福祿寿車は境内へ曳き出され午後から人形からくりを奉納披露し、当番町内の町曳きを行います。当番町内は氏子町内を8ブロックに分けた年番で担当しており、毎年曳行コースが変わります。町曳き後山車は若宮八幡社に戻り、夜には山車に提灯が飾られます。16日の例祭では午前中に本殿で神事が執り行われ、午後からは神輿を先頭に那古野神社への渡御が行われ山車と人形からくりが奉納されます。



牛立天王祭



祭礼日 7月第4日曜日

祭礼場所 天王社・八幡社・斎宮社

歴史

牛立町の天王社は津島市の津島神社から勧請した社で、氏神である八幡社と同じ敷地内に祀られています。慶長15年（1610）以前より津島神社の御師が牛立村に御札を配りに来ていたことが津島神社の「大吉檀那帳」に書かれています。祭の開始時期は不明ですが、文化文政期には提灯を飾った小車を出し、慶応元年（1865）に八王子神社（名古屋市北区）の祭車を牛立村が購入したと言われています。市の無形民俗文化財に指定されています。

内容・見どころ

前夜祭の朝5時に境内を掃除し、提灯の飾り付けが行われます。午後7時になると提灯を一齐に点灯します。本祭当日は朝5時頃から山車「牛頭天王車」の準備が行われ、朝9時に八幡社の祭文殿にて祭事が行われます。その後、午後には八幡社と斎宮社（熱田区）の間を山車が往復します。斎宮社ではからくり人形の舞が披露された後、午後8時になると提灯に火が入られます。八幡社に戻ると、境内で最後のからくり人形の演技を行います。



とだまつり
戸田祭り

歴史

元禄15年（1702）に始まったとされ、戸田の一之割から五之割の各割で祀る神社へ山車が巡行します。寛政8年（1796）からは人形師鬼頭二三のからくり人形が山車に乗せられました。祭には山車まつりと提灯祭があり、戦前、山車まつりは5～10年に一度行われ、大豊作の際にも曳かれることがありました。それ以外の年は提灯祭でした。現在山車は一、三、五之割が毎年曳行し、4年に一度5輦の山車揃えが行われます。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

10月第1土曜日・日曜日
(5輦揃えは4年に1回)

祭礼場所

八幡宮・天満宮・鈴宮社・白山神社・神明社

内容・見どころ

1日目は各神社の境内でお囃子や人形からくりが披露され、各割で道踊りが踊られます。2日目は、5輦そろって当番割を先頭に戸田小学校に山車を曳き入れます。人形からくりや道踊りが披露された後、各宮へと帰還します。各宮では、山車の屋根に付けられた桜花の柳の枝を外し、祭は終了します。この柳を家の玄関などに飾ると魔除けや無病息災、神社にまつわる御利益などを受けられるとされています。

とべてんのうさい
戸部天王祭

歴史

富部神社は慶長8年（1603）、津島神社から勧請されたことに始まります。本殿は慶長11年に建造され、国の重要文化財に指定されています。かつては蛇毒神社と呼ばれていました。祭は江戸時代まで旧暦の6月11日・12日に行われており、2輦の車楽が曳き出されていました。車楽は、慶長11年もしくはそれ以前から祭に参加していたと考えられています。市の有形民俗文化財に指定されています。

祭礼日

スポーツの日前日の日曜日

祭礼場所

富部神社

内容・見どころ

車楽は2階建てで、2階の屋根上に社壇とも言われる屋形を載せていました。屋形には能人形2体を据えて松を飾っていました。屋形の周囲や屋根上だけでなく柱などにも幕類で装飾するところに屋形の特色があります。2階部分の屋台では鞆鼓を付けた稚児が乗り込んで稚児舞が舞われていました。現在では車楽は曳行されず、例祭のときに飾り付けられ蔵に入れた状態で公開されています。現在の祭礼には狸々と呼ばれる大人形が多数参加しています。



那古野神社例大祭



三之丸天王社（現在の那古野神社）の創建は社伝によると延喜11年（911）とされています。戦国時代には戦禍で焼失していますが、天文8年（1539）織田信秀が再興しています。天王社の祭礼は天王祭、祇園祭とも称して毎年6月15日・16日の両日に行われ、かつては2輦の車楽が飾られていました。15日当日は宵祭として車楽に多くの提灯が掛けられ火が灯されていました。名古屋村、広井村からは見舞車が出されていました。

15日は宵宮で境内南にある能舞台の西へ、消失を免れた唯一の車楽を組み立て、多くの提灯で津島の巻藁船のように半円球状に形造ります。翌16日は朝祭で、かつて飾られていた2体の能人形（楊貴妃と玄宗皇帝）を、社殿の前にそろえて飾っています。そして神輿が若宮八幡社まで渡御し、その日のうちに還御します。近年では祭礼日が休日などにあたる場合、旧見舞車の広井神明社の二福神車が献灯に参加することもあります。



本地祭り



祭が行われる星宮社の創始は舒明天皇の頃（629～641）と言われており、宝暦5年（1755）の文書に4輦の山車が曳かれていたことが記されています。一度は山車の曳行が中止されましたが、平成4年（1992）から各町で山車の復活に向けた取り組みを進め、平成16年までに、本格的な山車として復活しました。このほか本城町、星宮町はトラックベースの山車で祭礼に参加しています。

土曜日は昼過ぎより各町から山車を出し、午後2時半頃に星宮社に山車を入れ、山車を神社に置いて各町に戻ります。その後お囃子などが町内をまわり、再び星宮社に戻った後、提灯に火を入れます。山車は午後8時過ぎに星宮社を出発し、各町に戻ります。日曜日は、午前中から山車を曳き、午後の曳行後午後2時半頃に山車が星宮社に集まります。午後3時から御神事が執り行われ、その後、町内でのお囃子の後、山車は各町に戻って行きます。



鳴海表方祭り



祭礼日

10月第3日曜日

祭礼場所

鳴海八幡宮

宝暦5年（1755）の「尾陽村々祭礼集」には神輿渡御に従う狸や拍子台、笠鉦が記され、江戸時代初期は湯立神事が行われていました。安永8年（1779）の「鳴海祭礼図」には各町の笠鉦と屋台が、嘉永年間の「前之庵八幡祭」には、現在に近い囃子屋台と笠鉦車が描かれています。伊勢湾台風による休止から昭和38年（1963）に復活した後、祭礼日や山車曳行の経路、祭礼次第が変化していきました。市の無形民俗文化財に指定されています。

山車が曳行される前日の土曜日には、各町で祭礼のシンボルとも言える青竹のボーデン（梵天）が立てられます。日曜日には各町から「御車」と呼ばれる山車が出されます。一時期途絶えていた鳴海八幡宮に山車を曳き込む「宮入り」も現在ではほぼ毎年行われるようになっています。日曜日には神輿渡御も行われますが、渡御には各町から獅子の頭や狸などが出されます。夜には提灯が掛けられ、作町の辻での「御車廻し」などが行われます。



有松祭り



祭礼日

10月第1日曜日

祭礼場所

有松天満社

有松は元々、桶狭間村（名古屋市緑区）の支村として開発されたため、かつての氏神は桶狭間の神明社でした。江戸時代後期には、有松でも車輪が付いた祭車を出していたことがわかっています。山車3輦がそろうのは明治時代になってからで、本来は俄馬と笠鉦・音頭台を中心とした祭礼でしたが、伊勢湾台風後、飾馬行事が衰退し、山車を中心とした祭に変化しました。市の無形民俗文化財に指定されています。

有松天満社の祭では、東町の布袋車、中町の唐子車、西町の神功皇后車が曳行します。本祭当日は梵天を先頭に、山車を順番に曳き出していきます。山車が折り返す際に狭い道でほかの山車とすれ違うところも見どころです。切通しに着くと天満社に向けて人形からくりを披露し、参拝して祭事は終了です。夕方からは提灯に火が入れられ、旧東海道を曳行しますが、絞会館前などでからくりが披露されます。

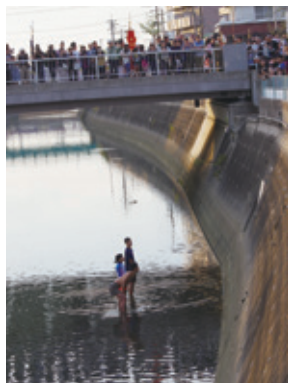


鳴海裏方祭り



神社に残る寛文13年（1673）の覚書には神輿のほか車5輛と踊り、馬2頭が出された記録があります。元は鳴海祭は一つの祭でしたが、元禄13年（1700）の争論後、成海神社（裏方）と鳴海八幡宮（表方）に別れたとされています。成海神社は熱田神宮との関係が深く東に位置することから東宮と呼ばれています。伊勢湾台風による休止から復活後は試楽と本楽が一つになり祭は1日に短縮されました。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭礼前日の土曜日には年行司にボーデン（梵天）が立てられ、夜には神楽が奉納されます。祭礼日の朝、花井では触れ太鼓がたたかれます。各町山車の飾り付けを行い、町曳きを行います。午後、山車は丹下、北浦、花井、城之下の順に成海神社境内に曳き上げます。4輛がそろると、境内で山車を廻す神上げを行います。神上げの後、神社から出た神輿が御旅所をまわり、扇川に天下泰平・国土安泰・疫病消除と墨書した御船札を流します（御船流し神事）。



大森天王祭



大森村は5つのシマで構成され、氏神・八劔神社とは別に各シマに天王社を祀り、夏の田植後に津島神社から御札を迎えてオマントを奉納していました。江戸時代に伝染病が流行した際、白張提灯を多数灯して大八車を曳かせたところ病がなくなったと言われ、以後は旧暦6月25日に車を曳くことになりました。伊勢湾台風を境にオマントを出すことが難しくなり、祭は山車まつりへと変化していきました。市の無形民俗文化財に指定されています。

祭当日の朝、八劔神社境内の納庫から山車を曳き出し、御札を祀り、神楽を奏した後、各シマや天王社の跡地への巡行を始めます。西嶋宿、西嶋天王社跡、八龍社、大森寺、東嶋天王社跡、東嶋宿、法輪寺、新田嶋天王社、新田嶋宿、白龍神社、中嶋天王社跡、中嶋宿の順番に神楽とお囃子を奉納しながらまわります（隔年で変更）。それが終わると八劔神社に向けて山車は帰還し、八劔神社・秋葉神社・天王社に向け神楽を奉納し、祭は終わります。



いしとりまつり
石取祭り

津島神社は社伝によると慶安4年（1651）の創祀とあり、享保年中に再建されたとされています。津島神社の祭礼は、昭和10年（1935）まで近隣地区と同様に神輿による祭礼が行われていました。昭和10年、桑名から祭車4輛を購入したのを機に石取祭りが行われるようになりました。石取車は江戸時代、桑名で河原の石を神社に奉納する際に使われた車でした。

祭礼日

5月第4土曜日・日曜日

祭礼場所

津島神社

内容・見どころ

名古屋地区唯一の石取型の祭車です。桑名の石取祭と同様、鉦と太鼓を激しく打ち鳴らしながら町内を曳行します。祭車のうち1輛は戦後桑名に戻され、現在は3輛の祭車で祭が行われています。

